

『小説・修復腎移植』



著者・青山淳平

挿絵・山本良秋

発行所・本の泉社

## 予兆

春が来て、忙しくしているうちに五月になった。

この間、水野は毎月一度、宇和島へにかけて丸山の診察をうけ、診療所で内藤に会った。なにも変わったことはなかった。懸念していたうわさは立ち消え、恵州会病院では全国からやってきた透析患者が移植の順番を待っていた。丸山は月に三回のペースで腎移植手術を行い、レシピエントのいのちを蘇らせていた。五月の第三水曜日に内藤にあったとき、水野はふりかえった。

「あれは、本当に刑事だったのかなあ」

ゆったりかまえていた内藤は、座り直し、

「県警のほうから、何かもれてきませんか」

と問いかえし、なお慎重な姿勢をくずしていなかった。

水野も医学部とその附属病院や警察まわりをしている記者からそれとなく情報をとるようにしていたが、移植医療の話題はまったくなかった。

変わったことといえば、むしろ水野の家庭でおこっていた。

久美子がたびたび鍋をこがすようになった。煮物をしながら別のことをしていると、火をつけていることを忘れてしまうのである。水野の両親はすでに他界しているので、近くに住む久美子の年老いた母に、連休明けから昼間は家に一緒にいてもらうことにした。

「これまで心配をかけたばなしだったから、久美子はぼくのこと疲れ、気持ちですりきれている。お義母さん<sup>かあ</sup>、誠に申し訳ないことをしました」

水野は傘寿をむかえる義母に頭をさげた。

妻は軽い鬱病だ、と水野は独自に診断していた。実の母が傍らにすることで、妻は元気をとりもどす気がした。かれは仕事帰りにスーパーで買い物をすることにした。夜のドライブは休日だけになった。

六月にはいつの間もないときである。義母が泊まってくれる、というのでたま遅くまで残って仕事をしていると、めずらしく津和田が部局へあらわれ、ちよつとよいか、と目配せをした。水野は席を立ち、津和田のあとについて廊下へでた。喫煙室にだれもないことをたしかめ、ふたりは中へはいった。津和田は卓上においたケントの箱から一本とりだし、愛用のカルティエライターで火をつけた。

「他にもないが、宇和島恵州会の丸山医師って、どんな人物やね？」

「丸山先生……」

津和田から思いがけない人物の名前がでて、水野はおどろいた。一呼吸おいて、当たりさわりのないことをいった。

「患者第一の仕事好きなドクターだよ」

「おいおい、その程度のドクターならこの愛媛にもたくさんおるがな。こっちが教えてほしいのは移植の腕。日本でもトップクラスらしいな」

「腎臓では、図抜けとるよ」

「ほうか、図抜けとるか」

津和田は自らにいきかせるように復誦した。

「なんだ、津和田。なにかあったのか」

だれか腎臓のわるい身寄りでもいるのか、と水野は案じた。すると津和田は水野の懸念をふりきるようにいった。

「うちの社会部がかんどる情報では、海南放送は丸山医師の特集番組をつくるらしいぞ。惠州会から許可がでて、さっそく移植手術の様子を収録することになったそうだが、患者の具合が悪くなって手術は突然中止になった。ところがそれでも連中は宇和島へでかけ、丸山医師へのインタビュー、移植外来の診察室と診察の様子、手術室や人工透析室、それに惠州会病院の建物の景観やまわりの景色などをえらいていねいに収録したそうだ」

「そうか、まあ手術の中止はたまにあることやから、次のときに撮ればいい。それでうまく編集して、その特集がキー局の日テレから全国に放送されるとええなあ」

移植医療への理解を深めるチャンスである。水野にはよい話だった。ところが津和田はいたって冷やかだった。

「あんたは相変わらず人がいいな。おれはなあ、海南さんの話を素直に受けとめてはおらんぞ。どうもあやしい」

「あやしい？」

「そりゃ丸山医師の腕は日本一かもしれないが、しかしそれでいまの時期に特集というのはどうかね。移植推進月間というのは十月だろ。なぜこの時期に丸山医師なのか、どうも釈然とせえへん。海南の連中、何かつかんどる気がしてならん。これは前撮りの可能性がある」

「前撮り？」

水野のからだに電気がはしった。

新聞社でも予測される事態にそなえて、あらかじめ記事を準備しておくことはままある。

「あんたを前にしてすまんが、おれには移植というのが、どうにもなじめん。輸血ぐらいならともかく、腎臓や肝臓や心臓となるとどうもなあ。いのちにかかわることやから、理解や共感をせにやいかんと頭ではわかつとる。しかし今ひとつしつくりこんのや」

「健康な者には、しよせん他人事だから」

と水野はいった。当事者でないとわからない。

津和田はタバコの煙を換気扇のほうへむかってはきだすと、つづけた。

「実はなあ、水野。丸山医師は移植マニアと呼ばれているらしい。知っているだろ」

内藤医師から聞いたおぼえがある。聞いたたびに、不快な感情が胸のなかをか  
けあがる。

「だれがそんなこと？」

「社会部の者が耳に入れてきた」

「どこから？」

「それは、聞き忘れた」

「ふん、中傷や偏見はどこの世界にもある」

水野は吐きすてた。

「その通りだが、おれは移植マニアの噂が妙に気になる。海南さんは何らかの  
事態にそなえているのかもしれない」

「話はそれだけか」

水野のほおはびくびくとひきつっている。

「あんたなら、いろいろ情報をもっているはずだが」

「こちらからは何も無いな」

水野は津和田に背をむけ、喫煙室のドアを引いた。

津和田はその背に言葉をあびせた。

「移植を受けた患者には執刀医は神様だそうだが、その気持ちはおれにもわ  
かる。しかし水野、ジャーナリズムでメシを食う者にとっては、社会正義こそが  
使命じゃないか。もっと冷静になれ。客観性を見失ったらジャーナリストとして  
失格だぞ」

水野はクルッとふりかえり、投げつけるようにいい返した。

「それこそ、いらんお世話だ」

翌日、水野は内藤の携帯へ電話をいれ、津和田から話のあった海南放送のうご  
きを伝えた。真珠の養殖筏が浮かぶ入り江を横目にバイクをこいでいた内藤は  
バイクをおりて息をととのえ、冷静に応えた。

「丸さんだって、全能じゃありませんよ。患者さんの望んでいた結果にならな  
い手術だってある。十分承知のうえの手術でも、結果が思わしくないと本人だけ  
じゃない、家族にはもっと深刻な打撃です。だからよく思わない患者さんだっ  
ていますよ。中傷があっても甘んじて受けなきゃなりません。だから中傷の噂とテ  
レビ局のことは別だと思えますね」

「しかし、気になります」

「海南放送にだれか親しい方はいませんか。なぜいま、丸山医師の特集を組む  
ことになったのか、尋ねてみたらどうですか」

と内藤は水野にすすめるのだった。

さつそくテレビ局の知人にそれとなく訊くと、特集ではなく地元で活躍している人々をピックアップする「伊予路の人と風土」という三十分番組で丸山医師をとりあげる、ということだった。水野は知人の説明を信じた。

七月にはいつて最初の土曜日になった。

この日、松山の障害者福祉センターの大会議室を借りて「えひめ移植者の会」の総会が催された。昨年から演奏会を加えたことで、参加者の人数が増えている。会場には五十人ほどの移植者とその家族が県下各地からあつまってきた。

早く来た者が声をかけあい、椅子を運び、長机をならべて会場の設営をする。正面の壁に「えひめ移植者の会総会」と書かれた手製の横断幕をとりつけ、講演の演題と講師の氏名を大書したとりのこ用紙をはり、放送器具の調整をした。そのあいだ、会場の外の廊下では、ロングドレス姿の有吉が引率してきた十数人の子どもたちと、手話コーラスのリハーサルをしていた。この一月に、水野が昨年と同じアイリッシュハーブの演奏をたのむと、有吉は快諾したうえで、音楽教室の子どもたちも出演させたい、と申し出てくれた。もちろん大歓迎である。水野は有吉の前向きな姿勢に感じるところがあり、

「来年は、ぼくもフルートを吹きます」

と約束したので、彼女とのアンサンブルも来年は実現しそうである。

講演をひき上げた内藤は「日本の医療の危機」と題し、およそ五十分、次のようなことを話した。

われわれがこれまで常識としてきたいのちに対する概念や思いが、いま大きく様変わりをはじめている。生命現象への自然科学的な解明の深まりや医療技術の飛躍的な進歩、さらには唯物論的世界観の浸透が昔のわかりやすくやすらかな自然死を消滅させてしまった。その結果、ひと昔前ならとくに死亡しているはずの患者が医療機器につながれて生かされているという現実が生まれた。ところが脳死や植物人間といった現代の先端医療がひきおこす問題は、日本ではいまだ政策的に放置されたままである。そのため患者が移植という先端医療をうける権利においても、欧米にくらべてまだまだ政策的な遅れが理由で事実上制限されてしまっているのである。

さらに、もうひとつ深刻なのは医療行政である。

二十年間、公立病院の院長をして痛感したことは、保険診療という強固な枠のなかに、臨床医療が寸分のすきもなくはめこまれてしまっている現実だった。保険診療をにぎり監察する役人の権限はつよくなるばかりで、医者<sup>トモシヒ</sup>の職業的な裁量権はもはや風前の灯火<sup>トモシヒ</sup>になっている。医者は患者の自己決定権にもとづくインフォームドコンセントの書類をせっせと作成し、医療訴訟にそなえてカルテ

をみっちりと書く。そしてマニュアルやガイドラインを何よりも尊重し、お役所の保健指導要綱を臨床医療の教典のように大切にしようになった。何事も決まったとおりにやればよいのである。昔の医者のパターナリズム（父権主義）はすっかり影をひそめ、保険診療を錦の御旗みはたにした役人の公権力が臨床のすみずみにおよぶようになった。役人のなかには、保険医をまるで被疑者あつかいし、机をたたいて、お前の保険医資格などいつでも取り消してやる、と恫喝どっかつする者までいる。このような高圧的な指導を苦し、自殺に追い込まれた医師もいる。法律では研鑽けんさんの場として、保険医は厚生労働大臣の指導を受けることが義務になっているが、行政上では任意の協力のもとに指導をあおぐのが本来のすがたであって、指導の場が役人の支配になっている現実がある。こうした現状は医療本来のすがたとは決していえないのである。

内藤の話はいつになく力がこもっていた。

コンサートの準備のあいだ、顧問の席にもどってきた内藤に水野は謝辞を述べ、「お役所の保健指導要綱が臨床医療の経典」というのはいかにも辛辣しんらつですね、といった。内藤はぶぜんとした顔で、

「水野さん、厚生省の権限は絶大ですよ。意に沿わない病院や医師に対しては診療内容を徹底して精査する。息の音をとめることだってできますから」と応え、役人が権力をふりまわすことへの不快感をあらわにするのだった。

子どもたちが舞台上に整列した。

有吉のハープの伴奏で手話コーラスがはじまった。曲目は「翼をください」と、秋川雅史の歌でリリースされたばかりの「千の風になって」のふたつである。歌声も手話のしぐさも可愛く、会場はたちまちなごやかな雰囲気になった。

この小さなコンサートの終わりに、有吉はハープを奏でながら、自分で作詞編曲した「ありがたうく生かされる奇跡」を歌った。

父親からもらったふたつ目の腎臓が働きはじめ、ふたたびふつうに生活ができるようになった歓びを詩に書きとめているうちにメロディーがわきあがってきた歌である。二十八の歳に母からもらった腎臓がダメになり、休職し人工透析でいのちをつないでいたところが、彼女にとってもっともつらく苦しいころであった。静脈の血管がほそく、シャント（腕の動脈と静脈を外科的につないで、静脈に直接動脈の血液がながれこむようにする吻合箇所）を九回もつくりかえた。大やけどのあとのようになった両腕同様、彼女のこころもボロボロだった。

（なぜ、わたしだけが？）

という思いがふつきれなかった。

教壇に立てなくなり、世の中や家族のやっかいものになった、という現実が彼女をひどく苦しめていた。ひそかに想いをよせ、家庭をきづくことを夢見た男性ひとのこともあきらめた。何度、死のうと思ったことか。このようなとき、いつも彼女をばげましてくれたのは、透析につながれたベッドから見上げた青い空やながれゆく雲であり、さまよい歩いた小道でみつけた名もない花や小さな昆虫たちであった。空も風も小鳥も一木一草までもが自分のことを見守っていてくれる。そのように感じるようになったとき、感謝の思いがつきあげてきたのだった。

〈生んでくれて ありがとう／育ててくれて ありがとう／出会えたことに ありがとう／今日という日 ありがとう／いま この瞬間とき ありがとう／ずっとずっと ありがとう／生かされる 奇跡／生かされる 奇跡〉

コンサートが終わって会場の後片付けをしていると、有吉が水野のほうへやってきました。

「すみません、重くて……」

ふりかえり、アイリツシユハープを納めた黒いケースを目でさした。いつも自分で運ぶのだが、今日は重く、うごかせないという。だれか車まで運んでくれる男の人はいないか、と助けをもとめた。

「いや、こちらこそ、気が利かずに」

水野はケースのところまで小走りにかけ、もちあげた。たしかに重い。男でも少し気を入れないと運べない。楽譜をもつ有吉について階下へおりると、子どもたちの父母がケースの運搬をひきうけてくれた。会場へもどると、様子を観察していた内藤が心配した。

「すこし疲れていたみたいだが」

「ここ最近、クレアチニンが上がっているそうです」

「いくらですか」

「2を、少し……」

「そうですか、無理は禁物ですね」

2をこえると、黄色信号である。腎機能が回復し下がるケースもあるが、悪化の場合、一年間で4レベルまで進行し、8になると透析か移植の準備をしないと、いのちはもたない。

「まだ若いから、透析は可哀そうです」

と水野は有吉の先行きを案じた。「移植したら、人生が百倍輝くようになった」と彼女が話すのを聞いたことがある。水野自身はモノクロからカラーへと世界

が変わる、と表現していたが、有吉の歌声に耳を傾けながら、ふつうに生きていく喜びをかみしめていたのだった。

いつもの暑い夏がゆき、秋の気配がただよいはじめた八月下旬、水野は全国移植者協議会（略称・全移協）の理事会と移植ゼミナールに参加するため、早朝の飛行機で大阪へでかけた。この全移協はえひめ移植者の会と同じころに設立され、水野は当初から四国担当理事をひきうけていた。会長は商業デザイナーの林通夫という五十過ぎの男で、大阪大学医学部付属病院で妹の生体腎を移植していた。林の体調はきわめて良好で、免疫抑制剤を服用しているほかは、健常者とまったくかわらず、自分が移植者であることを忘れてしまうほどである。

水野はバスと地下鉄をのりつぎ、中央区大手前の通りに建つ大きなビルのなかへ入った。午前中はこの壮観なビルの中にある会議室を借りて理事会がある。

臓器移植法の施行後もうっこうに進展の兆しが見られない移植医療を推進するため、全移協では臓器移植法の改正を各方面に働きかけていたが、この日の理事会ではこれに関連した事柄について、意見をかわした。重要な改正点は、脳死におちいったとき、本人が生前に臓器提供の意思を示していたときはもちろんだが、本人に拒否の意思表示がなく、かつ家族が承認したときには臓器提供ができる、という内容に改めることであった。こうすれば、脳死からの臓器提供が促進される可能性があり、提案した林の説明に理事の全員が賛成した。

昼食に用意された弁当を食べ終えて、缶入りのお茶をのどに流し込んでいると、水野の傍らに林がやってきて話しかけた。

というのも林は先日、午後からのゼミナリオで講師をすることになっている全国移植学会副理事長の多島信一教授が勤める大学へ講師依頼のあいさつで伺ったときに、宇和島の丸山医師のことが話題になったからだった。

「林さんよ、あそこほど僻遠の地はないぜ。縄文時代の昔から同じ一族だけが住んでいるから、お互いすつかり血が濃くなった。それでだれの腎臓を移植してもうまくゆく。丸山さんの腕も宇和島という土地柄に助けられていると思わんか、そうだろ」

と多島教授が真面目な顔をして同意をもとめるので、つい、

「それ、ほんまですか」

と林は聞き返してしまった。

多島はしばしニヤニヤしていたが、

「まあ巷のブラックユーモアだが、丸山さんは惠州会へ移ってだいぶ無理をしているようだぜ。問題がおこらにやいいが」

といかにも訳ありの顔をし、ぶ厚い唇をかんだ。

林は水野に多島とのやりとりを伝え、

「丸山先生にお変わりありませんか」

と案じた。

「ええ、惠州会でますます御活躍です」

「移植の件数のごつつう増えていますねえ」

「それは惠州会が総力をあげて取り組んでいますから、当然ですよ」と水野は応じたが、一抹の不安がじわっと広がってゆくのを覚えた。

ゼミナリオは、医療関係者と一般社会人を対象とした移植医療の啓発と研修を目的としており、移植学会の幹部も何人か参加している。多島はパワーポイントをたくみに活用して、日本でも取り組みがはじまった肝臓移植の臨床事例についてわかりやすく紹介した。それから明るくなった会場の方へむきなおり、臓器移植全般の現状と課題について話した。その中で、臓器移植法の制定にともなう臓器移植の全国的なネットワークができ、移植医療の公平性と透明性が担保されることになったことを評価した。そして今後、臓器移植法も国際的な標準にまで改正されることになるので、日本の移植医療もこれからおおいに進展することになるだろう、という見通しを示した。

質疑の時間になったが、手をあげる者はなかった。

会場の後の席で聴いていた水野は立ち上がった。マイクをもった女子事務員がかけよってきた。

「臓器の提供数という点からは、わたしは臓器移植法の改正にあまり期待はしていません。御承知のとおり糖尿病を悪化させて人工透析をはじめた患者が年々増えております。しかし死体腎の提供には限度があり、移植後進国の日本では移植希望者は十五年も待たないと腎臓の提供をうけられない、という絶望的な状況があります。かといって両親や兄弟から腎臓をもらうのは移植本来のすがたではありません。腎臓の提供を増やす方法は他にはないのでしょうか」

水野の脳裏に丸山のすがたがよぎった。

多島はゆつくりと二度三度うなずき、起立したままの水野へむかって質問を投げ返してきた。

「さあ、どうでしょうねえ。水野さんとおっしゃいましたか。あなたこそ何かよいアイデアをお持ちでしたら、ぜひ教えていただきたい」

聴衆が水野のほうをふりかえった。

「それは……」

思わず下腹部にうめこまれた病腎のことを話そうとして、水野は声をつまらせた。日本中で毎日百個ちかい病腎が廃棄されているのだが、そのことにここでふれることはできない。

「画期的なことがあるばと思ひまして……」

そこまでというと、水野は押し黙った。

多島は卓上のマイクをひきよせて応えた。

「移植医療への啓発をすすめれば、死体腎の提供もやがて欧米なみになってゆくと思いますよ。臓器移植法の改正は国民の意識を変えてゆく絶好の機会です。会場のみなさんも一緒になって啓発に取り組もうじゃありませんか」

聴衆に呼びかける多島の耳触りのよい言葉を耳にしながら、水野は何か根本的なことが欠けているように思えてならなかった。

それから一月余りたった九月三十日の土曜日のことである。

興奮冷めやらぬ面持ちで夕会からもどってきた部長代理が、遊軍の連中が社部へかき集められている、と告げた。特命の取材チームが編成され、明日の未明に宇和島へ向かうという。

「宇和島へ？」

不安にかられ、水野は帰り仕度をしていた手をとめた。

卓上の電話機で役員室の秘書をよびだし、津和田につないでもらった。電話にでた津和田は即座に、

「こつちからかけようとしていたところだ。上がってこないか、話したい」と誘った。

応接ルームで向かい合うと、津和田は説明した。

夕刻前だった。県警の記者クラブにふらっとあらわれた馴染みの刑事が、たむろしている記者たちにむかって、

「あんたらなあ、こんなところで、のんびりしとられん。明日は朝から宇和島で大きなパクリがあらいな」

ともらしたのである。

気心が知れた一部の記者に、ベテラン刑事がこうした情報をそれとなくもらすことはままあったが、記者クラブでの公表は異例だった。偶でごろ寝をしていた連中はいっせいに立ち上がり、ぼんやりテレビを見ていた若手の記者たちは煙草の火を灰皿におしつけた。あとは競争である。みんな本社や支局へいっせいに連絡をはじめた。そして夕刻、愛媛新報はもとより中央紙も各テレビ局も宇和島で発覚直前となっている事件への取材体制を組んだ。なんの摘発か、これまで何度かあったタレこみで、どこのメディアもしっかり見当がついていたのである。

津和田は念をおすようにいった。

「ここまで話せば、もうわかるだろ。宇和島で臓器売買があった。臓器移植法施行以来、初めての摘発だ」

「そうか、やはり臓器売買か」

水野はまなじりをつりあげた。

津和田は喜悦した顔をいっそうゆるませる。

「これは全国的な大ニュースになる。うちの宇和島支局では、すでに容疑者の

自宅があるマンション周辺と惠州会病院前の駐車場に記者とカメラマンを待機させている」

「惠州会も？」

「当然じゃないか。これまでちよくちよくタレこみがあつておおよそのことはわかつている。グーグルの地図をみると、容疑者は樺崎砲台から少し行ったところにある水産会社の役員だ。あんたも知っているとおおり、惠州会はそこから目と鼻の先だ」

「手術は惠州会か」

「当たり前だろ、丸山だ。ほかにだれがいる！」

津和田はしてやったり、という顔をした。

内藤が案じていたことがとうとう現実になったのである。新春から水野がずっと抱えてきた漠とした不安の正体が明日、日本中に暴露されようとしていた。津和田はとどめをさすようにいった。

「手術はちようど一年前の九月二十八日。百五十万円相当の車一台と現金三十万を与えて容疑者が妻の知人の女性の腎臓を買い、その腎臓を丸山医師が容疑者に移植した」

「しかし……」

唇がふるえ、水野はいよいよどんだ。

「まだ摘発の前に、よくそこまで情報をつかんだものだ」

「なに、水野。あれは五年前になるかなあ。宇和島署も県警もまったく無関係な市民を誤認逮捕して、一年以上も拘置所に留置するという冤罪事件があつただろ。あれで警察も検察もすっかり信用をなくしていたから、こんどは起死回生のビッグチャンスなんだ。大いに報道してもらいたいという腹だ」

「なるほど、するとちびちびとメディアへタレこんでいたのもサツ筋か」

「いや、サツじゃない。それはちがう、まったくちがう」

「じゃあ、だれだ？」

津和田は怒りをふくんだ顔でいさめた。

「おいおい、情報源の秘匿はジャーナリストのモラルだぞ」

「それは恐れ入るな、しかしひとつ答える。サツじゃないなら、大学か？」

「知らん、知らん」

津和田は手をふり、しらをきりとおした。

あきらめて、水野が行こうとすると、津和田は水野と肩がふれるほど寄ってき

た。顔をちかづけ、妙にやさしい声をだした。

「実はなあ水野、ちよつといいづらいのだが……」

「なんだ、どうした？」

「あんたも知っているとおおり、うちは文化学芸欄がどちらかという弱い。それで、十月からは編集局のほうを手伝ってくれないか。この方面に明るいやんたが編集委員として、文化的なかがりする特集を組んでほしいのだ。どうだ、やってくれるね」

「編集委員？」

部長から編集委員は組織上の権限からいえば、降格である。

突然の異動通知に水野の頭は一瞬、熱くなった。が、すぐに解った。異動は宇和島の事件が関係している。津和田も困惑した表情である。

「この事件、社では丸山先生が逮捕される、とみているのか」

「そんなことはわからん。見通しはまだ立たんが、あんたも知っているとおおり社会部では特命チームをつくり、移植医療の報道特集をやる。それであんたは特命チームへ編集委員の立場からいろいろ教えてやってほしい」

という、津和田は頭をさげた。

教えてやれ、というのは逆で、本音は報道特集に口出ししてくれるな、ということである。その意味で津和田は頭をさげている。

察して、水野は役員室をでると、生活文化部へは寄らず、まっすぐ社員駐車場へ降りて車の中にはいり、携帯で内藤へ摘発があることを知らせた。ところが内藤はある中央紙の松山支局からすでに電話で情報をもらっていた。支局では容疑者逮捕後、直ちに再度電話をいれるので、この事件のコメントをいただけないか、と依頼されたという。

「丸さんのことをにがにがしく思っている特定の勢力とマスコミにしてみれば、やつと巡り来た祝祭ですよ。事件の本質などおかまいなしです。誠に嘆かわしいことです」

内藤は電話のむこうで声を落とした。